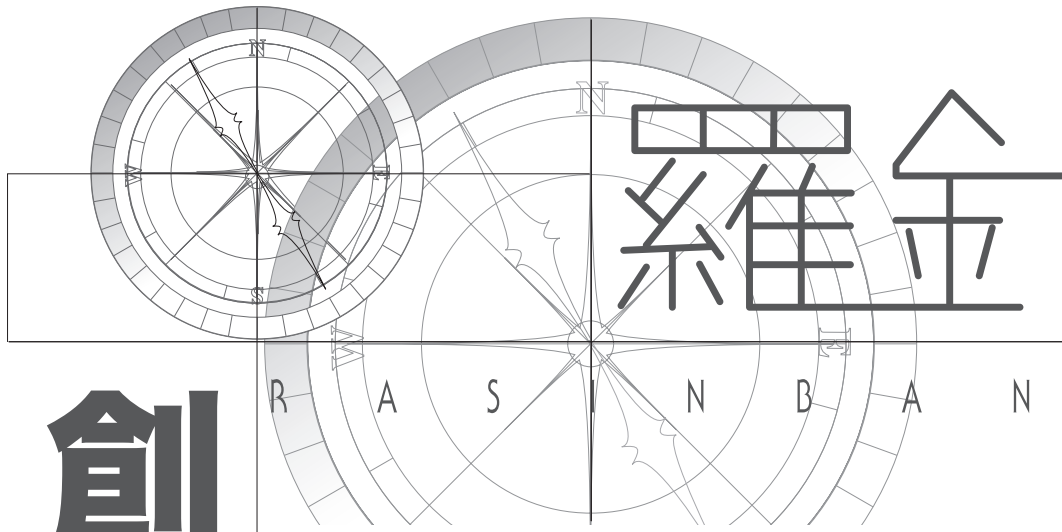


# 創価学会の「御書根本」

COMPASS

http://www.hodoin.net

発行所：東京都豊島区南池袋  
一丁目十三番十六号  
日蓮正宗法道院法華講  
03 (3984) 2650

この新聞は、創価学会員が、誤れる創価学会の実態を正しく認識し、一日も早く日蓮正宗の信仰に帰依することを願って書かれたものです。

その内容は、すべて誠意をもって真実を述べたものであり、いたずらに創価学会を誹謗中傷するためのもではありません。けれども、長年、創価学会に身を置いてきた人や創価学会を信じて疑わない人は、この新聞にとまどいや抵抗を感じることでしょう。

しかし、ことはあなた自身の未来永劫にわたる幸福と成仏にかかわる重大な問題です。

どうか、勇気をもって、この新聞を熟読し、創価学会の実態と自分が置かれている現状をしっかりと見つめ直してください。一人でも多くの創価学会員が正しい信仰に目覚め、真の幸福と成仏への道を歩まれることを祈ってやみません。

## 創価学会は「御書根本」「大聖人直結」だから正しい

### 1 御書根本

日蓮大聖人の仏法を信仰するうえで、御書の御教示を根本としていくことは当然です。しかし、御書の御文を正しく解釈するためには、相伝によらなければなりません。

日蓮大聖人は、  
「此の経は相伝に有らざれば知り難し」（一大聖教大意御書九二ページ）

と御教示されています。この御文について第二十六世日寛上人は、

「宗祖の云わく『此の経は相伝に非ずんば知り難し』等云云。『塔中及び蓮・興・目』等云云」（撰時抄愚記文段三三七ページ）

と述べられ、「相伝」とは、日蓮大聖人以来の唯授一人の血脈相承にもとづくものであると御指南されています。

現在の創価学会が主張する「御書根本」とは、相伝によらず、自分の都合のいいように御書を解釈することであり、それは唯授一人の血脈を否定するためのまやかしにすぎません。

かつて池田大作も、

「日蓮宗身延派にあつても、南無妙法蓮華経の題目を唱えている。御書もある。（中略）外見からみればわれわれと同じようにみえるが、それらには唯授一人・法水写瓶（ほつすいしやびょう）の血脈がない。法水写瓶の血脈相承にのつた信心でなければ、いかなる御本尊を持つも無益であり、功德はないのである」（広布と人生を語る八一―二八ページ）  
と書いていました。しかし、池田が率いる現在の創価学会は、唯授一人の血脈を否定しており、この池田の言葉とは、まったく違ったものになっています。これはまさしく自己矛盾以外の何ものでもありません。

また創価学会は、「御書根本」といながら、御書の御文に背いています。その一例を挙げると『松野殿御返事』に、

「法華経を持つ者は必ず皆仏なり。仏を毀（そし）

りては罪を得るなり」（御書一〇四七ページ）とありますが、「法華経を持つ者」、すなわち日蓮正宗の僧俗を誹謗中傷している創価学会は、この御教示に違背し、御書に反しています。

したがって、創価学会のいう「御書根本」などは、その場限りの口先だけのものであることは明らかです。

### 2 大聖人直結

創価学会が「大聖人直結」を主張する真意は、日蓮正宗の御歴代上人の血脈相承と七百五十年の伝統を否定して、池田大作がただちに日蓮大聖人の教えを受け継いでいるかのように会員を欺くためです。

日蓮大聖人は『身延山付囑書』に、

「釈尊五十年の説法、白蓮阿闍梨日興に相承す。身延山久遠寺の別当たるべきなり。背く在家出家共の輩は非法の衆たるべきなり」（御書一六七五ページ）と、大聖人の仏法は一切は日興上人ただお一人に伝えられ、この唯授一人の血脈相承に背く者は「非法の衆」であり、大謗法であると御教示されています。唯授一人の血脈は日興上人から日目上人へと嫡々（ちやくちやく）付法相承され、御当代日興上人に伝えられています。

第二祖日興上人は佐渡の信徒たちに対して、

「案のごとく聖人の御のちも、末の弟子どもが、誰は聖人の直（じき）の御弟子と申す輩（やから）多く候。これらの人、謗法にて候なり」（歴全一一八四ページ）

# 創価学会の誓ひ（3）

と仰せられ、付法の貫首であられる日興上人をさしおいて「日蓮大聖人直結の弟子」を名乗ることは謗法であると厳しく戒められています。したがって創価学会が、唯授一人の血脉を否定し、「大聖人直結」を主張することは、日蓮大聖人と日興上人の御教示に背く大謗法であり、増上慢のきわみなのです。

なお、これら「御書根本」「大聖人直結」などの邪説は、昭和五十二年教義逸脱問題の折に創価学会がいい出したものです。この時、創価学会は宗門からの指摘を受けて謝罪し訂正したのですが、平成三年以降、ふたたびこの邪説を持ち出して主張しているのです。宗門はその後も、再三にわたってこれらの邪説を徹底的に破折してきました。それにもかかわらず、創価学会は臆面もなく同じことを繰り返し主張しています。このことは、宗門から破門された創価学会にとつて、これらの邪義にしがみつく以外に宗教として生き延びる道がないことを物語っています。創価学会の現状はじつに哀れで、みじめというほかはありません。

## 創価学会の信仰面について

### 1 「広宣流布を実現する団体は創価学会しかない」

創価学会は、何かというと「広宣流布」を口にしますが、本来、広宣流布とは、日蓮大聖人の仏法を正しく全世界に弘め、一切衆生を救済することを意味します。

現在の創価学会は、「日蓮大聖人の仏法」を護持継承する日蓮正宗に反逆し、実際は「日蓮大聖人の仏法」を破壊する集団になり下がっています。したがって創価学会は、「広宣流布」

を実現できる団体ではないのです。かつて総本山第六十六世日蓮上人は、創価学会のいう「広宣流布」について、「日蓮正宗の教義でないものが一閻浮提に広がっても、それは広宣流布とは言えないのでありませぬ」（達全一六二―一九五ページ）と厳しく戒められました。

今や日蓮正宗の僧侶と法華講員は、創価学会の悪質な妨害をもとめせず、僧俗一致して真の広宣流布実現のために勇猛精進しています。創価学会は広宣流布を実現するどころか、かえって広宣流布の進展を妨害しているだけなのです。

### 2 「活動に功德があるのだから、学会に間違いはない」

創価学会の信心活動に功德があるといいますが、本当にそうでしょうか。

むしろ、創価学会の幹部や離脱僧には、世間にも知られるような明らかな厳罰が続々と出ているのです。

その一例として、御法主日蓮上人や宗門を誹謗した人の末路を見れば、

○大石寺の合葬埋骨（がつそうまいこつ）に關し、正体不明の写真を提供して誹謗のものを作りました「離脱僧O」（97・3・4 37歳没）

○マスコミなどに宗門誹謗を宣伝していた張本人の学会本部広報室長「N副会長」（01・5・21 53歳没）

○日蓮上人に対する相承疑惑誹謗などに荷担した離脱僧の中心人物「O」（03・3・2 65歳没）

○総本山に対する墓地訴訟の先頭に立っていた女優の「S公明党国会議員」（03・8・9 66歳没）

○偽造写真のもととなった写真を学会に提供した「離脱僧S」（03・12・24 51歳没）

○池田大作の懐刀（ふところがたな）といわれ、創価新報での宗門攻撃を指揮していた「N副会長」（04・3・14 61歳没）

といった人たちが、次々と亡くなっている事実とは異常としかいえません。

日蓮大聖人は、熱原法難の際に法華講衆を迫害した太田親昌らが死去したことについて、「太田親昌・長崎次郎兵衛尉時綱（ひょうえのじょうときつな）・大進房が落馬等は法華經の罰のあらわるゝか」（聖人御難事 御書一三九七ページ）

と仰せられ、また、日興上人は平左衛門（へいのみさえもん）親子が謀叛（むほん）の罪で誅殺されたことについて、

「父子（ふし）これた大事にあらず。法華の現罰を蒙（こうむ）れり」（歴全一一九四ページ）と御教示されています。

日蓮上人を誹謗した大幹部や離脱僧らの連続する死亡は、まさに「法華の現罰」といふべきです。

それでもなお創価学会は、会員に対して『二七本尊』を宣伝し、宗門攻撃をけしかけ、「学会活動には功德がバンバン出ている」などといった誑惑（おうわく）しているのです。

あなたは創価学会が正法に背いた謗法集団になっっている事実と、日蓮大聖人の仏法的一切を承継される御法主上人を誹謗する者の末路を直視し、

『過去・現在の末法の法華經の行者を軽賤する王臣・万民、始めは事なきやうにて終（ついに）ほろびざるは候はず』（聖人御難事 御書一三九七ページ）

との御教示を、よくよく肝に銘じるべきです。

### 3 「創価学会は宗門の発展に貢献してきた」

創価学会が、過去に総本山・宗門に尽くしたことは、正法を外護する信徒団体として当然であり、学会がこれまで宗門発展のために貢献してきたことを否定するものではありません。

しかし、宗門は七百年にわたって、本門戒壇の大御本尊の御威光のもと、御歴代上人の赤誠の御尽力により、今日まで正法を護持してきたのであり、その日蓮正宗の歴史があつたからこそ創価学会員も大聖人の仏法にめぐり合うことができたのです。

こうした御本尊の功德力と七百年間の宗門の歴史を蔑（ないがし）るにして、「創価学会が宗門を大きくしてやった」などと主張することは、増上慢のきわみといふべきです。

現在、創価学会は「日蓮上人や宗門が創価学会を妬（ねた）んで破門にした」などといっています。宗門の発展に寄与していた創価学会を、何の理由もなく宗門が破門にするはずはありません。

宗門にとつては、正法正義を護持し、謗法戒の精神を守ることが第一ですから、創価学会が謗法を犯したとき、宗門は毅然として訓戒し、善導に努めました。しかし創価学会がそれを聞き入れなかったために、宗門は断腸の思いで創価学会を破門にしたのです。

多くの創価学会員が宗門に尽くしてきた功績を踏みにじったのは、宗門ではなく、池田創価学会であり、それは宗門に対する怨嫉（おんしつ）によるものなのです。

『折伏教本』より抜粋